

## 二本のバナナ

厲剣童

(訳 横田勤)

彼女は彼を探そうと決心をした。

それはほかでもない、あの年の、あの二本のバナナのためである。

このことは話せば少しばかり長くなるが、できるだけ長い話を短くすることにしよう。

それは三十年前のことだった。彼女はその時十五歳で、村の中学校の一年生だった。彼の父親は町から公社の林業センターに移動になり、彼と母親は人民公社の生産隊に入り村へやってきたのだ。そして彼は彼女のクラスに入り、しかも同じ机で勉強することになった。二人は仲良しになった。これは、男子学生と女子学生が話もせず、勉強机の中間に一本の深い太い線を描いた年代にあっては、実に珍しいことだった。

その日の午後の放課後、彼はこっそりと、丸めた紙を彼女のカバンに入れた。彼女は紙の中に何かが包まれていると、かすかに感じた。胸がドキドキした。彼女は急いで家に帰り、部屋の中に隠れるようにして開けて見ると、そこに黄金色の細長いものが二本あった。紙包みの中に一枚のメモがあり「これはバナナです。あなたにあげます。すごくおいしいです。皮をむいて食べるのを忘れないで」

彼女が慎重に一本の皮をむくと、白くて丸々した果肉が現れた。鼻先に持ち上げてちょっと匂いを嗅いでみると、甘くておいしそうな匂いが鼻孔をついて体の中にずっと入ってきた。彼女は軽く一口咬んだ。柔らかくて甘くてつるつるとして、とても口当たりが良い。これは彼女が初めて食べたバナナだった。以前に南の方に行った近所の人のお話を聞いていただけだった。彼女は自分が食べるのはもったいないと思ったので、夕ごはんのとき、残りの一本半を弟と妹、そして父親と母親にも分けてやった。いちばん下の弟は食べ終わると、指を何度もなめた。まるでそれは指でなくて良い匂いがしている甘いバナナのような匂いだった。彼女はそれか

らずっと、弟が指をなめている時の表情を覚えていた。

彼女はきちんと勉強し、将来のいつか、必ず家族全員にじゅうぶんに食べさせてやろうと決心した。

次の日、彼女は母親に二個ゆで卵を作ってもらい、彼にあげようと思った。バナナをもらったお返しにするつもりだったのだ。

彼女は自分と家族が初めてバナナを初めて食べたその楽しさを話した。

彼は、「バナナが好きなら、これからぼくが大きくなったとき、屋台を出してバナナを売るよ。街にぼくを訪ねておいで。毎日バナナを食べさせてあげる。お金は一銭も要らないよ」と言った。

「バナナなんかだれが欲しがるとは思いませんか。」彼女はほほを赤らめ、そう言いながらすぐ逃げてしまった。

中学二年の後期、父親の仕事が移動になり、彼は父親について街へ戻った。

村はとても貧しかったので、彼女の一家は数百里離れた、ある小さな町に引っ越しをし、親戚のところに身を寄せた。

この時くらい、彼女と彼は一度も会ったことがなかった。

彼女は自分の誓いをしっかり覚えていて勉強に精を出し、その年に中等専門学校に合格し、三年後に卒業して小学校の先生になった。

最初の給料を手にして、彼女は街まで駆けて行き、たくさんのバナナを買った。そして連日、弟や妹たちにげっぷが出るまで腹いっぱい食べさせた。

彼女はそれを見て笑いこけた。

その時、彼女はまた、初めてバナナを食べたときの様子を思い出した。

「彼はこのごろ、どうしているのだろうか。」

彼女は静かにため息をついて言った。

その後、彼女は結婚して子供を生んだ。平凡で幸せで楽しい日が過ぎていった。

いつの間にか三十年あまりが経っていた。

多くのことがぼんやりしているのだが、彼女は、何年も前のあの二本のバナナのことをよく思い出した。彼女を奮起させたあのバナナのことである。

あれから三十年後、彼女の連れ合いは病で亡くなっていた。

彼女はますますあの二本のバナナを懐かしく思うようになった。

彼女は彼を探そうと決めた。彼を探すただ一つの目的があった。それは彼に一言、ありがとう、バナナをありがとう、と言うためだった。

彼女はさんざん苦勞して、たくさんの人に尋ね、ついに彼の家を探し当てた。だが、彼女が見たのは、髪は乱れすっかり年老いてしまい、痴呆症になって目も見えなくなった母親の姿だった。

隣人は彼女に言った。「彼は三年前に亡くなってしまった。通りで屋台を出してバナナを売っているときに、酔っ払い運転の車にぶつけられて死んだ。

死ぬ前に母親に、自分の代わりに屋台でバナナを売りつづけてくれるように、屋台の屋号も変えないように、と言い残した。

彼が亡くなった後、母親は彼に代わって屋台を守っていたが、一日一日と眼が悪くなっていった。

とうとう去年目が見えなくなり、もう屋台を出すことができなくなった。

そして認知症の症状が出て、はっきりしている時もあればはっきりしない時もあるようになった。しかし母親は、からの屋台の所へ行って、座ったら最後、一步も離れずに一日じゅうそこにいることだけは記憶していた。」

彼女はそれを聞くと心が沈み、鼻の奥がじんと痛み、何かがあふれ出てきそうになった。

隣人はまた言った。「田舎から街へ戻ったその年、彼はすぐに学校を止め、屋台を出してバナナを売るといって言い争いになり、誰の言うこともどうしても聞かなかった。家族は彼を説得できずに、認めるしかなかった。この時から、彼はそこに一生涯とどまり、屋台を出してバナナを売り、結婚もしなかった。聞くところによると、彼はずっと一人の女性を待っていて、その女性に、県庁のある町にきて自分を探し当てたら、毎日バナナを食べさせてあげる、と言ったそうだが…今彼は向こうの世界に行って楽になったが、可哀そうなのはこのおばあさんで、一人ぼっちで身寄りがなく苦しい月日を過ごしている……」

彼女はそれ以上聞いていられずに、涙をぼろぼろ流し、よろけるようにして彼の家から走って出ていった。

実は、隣人も彼の母親も知らなかったのだが、彼はかつて非常に苦勞して何回か彼女の住むところに行っては、遠くから彼女を一目見て、戻ってきていたのだった。

それに、彼のあの古い勉強机の二番目の引き出しの中には、鍵のかかっている何冊かの分厚い日記帳があって、表紙に書いてあったのはすべて彼女の……

それからほどなくして、彼の家に、めがねをかけた五十歳前後の一人の女が来

て住むようになった。その女は、まるで嫁のように彼の母親に仕えた、という者もいれば、実の娘のように彼の母親の面倒を見ていた、と言う者もいた。

毎日、その女は空が明るくなってから暗くなるまで、彼の母親に付き添って、屋台でバナナを売っていた。あるとき女は破れたノートを持っていっしょうけんめいに読みつづけた。何回読んだか分からないほどだった。読みながら女はぼろぼろと涙を流し、流れる涙のせいで、老眼で見る視界がぼんやりとしてきた。

春夏秋冬、

寒かろうと暑かろうと、

女は、雨が降ろうと風が吹こうと、店を休まなかった。

(『2011年中国微型小説精選』より)

(中国語原文)

## 两根香蕉

厉剑童

她下定决心要找到他。

不为别的，就为了当年那两根香蕉。

这事说来有些话长，不过我尽量长话短说。

那是30年前的事了。她那时15岁，在村子里上初一。他父亲从县城调到公社林业站，他和母亲插队到村里。于是，他来到她那个班，并且成为同桌。两人相处不错。在那个男女生不说话课桌中间还要画上一道深杠杠的年代实属难得。

那天下午放学时，他偷偷将一团纸塞进她的书包。她隐约觉得纸里包裹着什么。她的心怦怦直跳。她慌慌地回到家，躲在小屋里打开，是两根金黄色细长的东西。纸包里有一张纸条：这是香蕉，给你的，很好吃，记住要剥皮吃。

她小心翼翼地剥开一根，露出白白胖胖瓢，她举到鼻子根，轻轻嗅了嗅，一股香甜的气息扑人鼻腔，直通五脏六腑。她轻轻咬了一小口，软乎乎，甜腻腻，滑溜溜，口感好极了。这是她第一次吃香蕉，之前只是听去过南方的邻居说起过。她不舍得自己吃。晚上吃饭的时候，把剩下的一根半分给了弟弟妹妹和父亲母亲。小弟弟吃完了，把手指头舔了又舔，仿佛那不是手指头，

是一根香喷喷甜丝丝的香蕉。她从此记住了弟弟舔指头时的表情。她决心好好念书，将来有一天，一定要全家人吃个够。

第二天，她让母亲煮了两个鸡蛋给他，算是对她给香蕉的一种回馈。她说了自己和一家人第一次吃香蕉的那种快乐。他说，只要你喜欢吃香蕉，以后等我长大了，就摆摊卖香蕉，你到县城找我，我天天让你吃香蕉，一分钱也不要。

“谁稀罕你的香蕉。”她的脸红了，说着，赶紧躲开。

初二下学期，父亲工作变动，他随父亲回到县城。

村子太贫穷了，她们一家搬到了几百里远的一个小镇投奔亲戚。从此她和他再也没见过一次。

她记住自己的誓言，发奋读书，当年考上了一所中专，三年后毕业当了一名小学老师。拿到第一个月的工资，她跑到城里，买了很多很多香蕉，直把弟弟妹妹撑得嗝气连天。她看了笑弯了腰。

那一刻，她再次想起第一次吃香蕉的情形。

也不知道他这些年咋样了。她幽幽地叹息道。

之后，她结婚生子，日子过得单纯、幸福而快乐。

一晃三十多年过去了。很多事情都模糊了，可是，她总不由得想起很多年前的那两根香蕉，那两根让她发奋的香蕉。

那时她老伴因病走了。

她越发想念那两根香蕉。

她决定找到他，找到他，只有一个目的，向他说一声谢谢，谢谢你的香蕉。

她费尽周折，不知打听了多少人，终于找到他的家。见到的却只有他的头发凌乱苍老不堪痴痴呆呆双目失明的母亲。

邻居告诉她，他三年前走了，在街上出摊卖香蕉时被醉酒驾车的司机给撞死了。临死前留下一句话：让母亲替他继续守着摊子卖香蕉，摊子的名号也不要变。他走后，母亲替他守着摊子，渐渐地，他母亲眼睛一天不如一天。直到去年眼睛瞎了，再也出不得摊子。人也变得痴痴呆呆，头脑时清醒时糊涂。可她始终记着到空摊子处坐着，一坐就是一整天，寸步不离。

她听了心里一沉，鼻子酸酸的，有东西要流出来。

邻居还告诉她，那年他从乡下转学回县城不久就辍学了，吵着嚷着摆摊

卖香蕉，谁说也不听。家里人拗不过，就答应了。从此，他就待在那里一辈子摆摊卖香蕉，一辈子没结婚，听说他一直等着一个女人，他曾对她说过，让她到县城找他，他天天让她吃香蕉……如今他走了倒省事了，只可惜了这老太太，孤苦伶仃苦度日月……

她不忍再听，泪流满面，踉踉跄跄，跑着离开他的家。

其实，他邻居不知道，母亲也不知道，他曾经几次费尽心思，跑到她那里找她，每次都远远地看一眼后就回来。

还有，在他的那张破旧的书桌的第二个抽屉里，锁着几大本厚厚的日记本，上面记的全是她……

不久，他的家里住进一个女人，一个戴着眼镜的五十岁左右的女人。有人说，那女人像媳妇一样伺候他的母亲。也有人说，女人待他的母亲更像亲闺女一样。

每天，那女人都天明到天黑，陪着他母亲出摊卖香蕉。有时女人也会拿着一个翻破了的本子，认真地读着，不知有多少次，读着读着，女人泪流满面，泪水朦胧了那副老花眼。

春夏秋冬。

寒往暑来。

女人，风雨无阻。

